

# 儒教概念受容に関する東西の特殊性：多様な忠孝解釈

筑波大学人文社会系 井川義次

## 日本における片務的「忠」・「孝」解釈

「君雖不君、臣不可以不臣。父雖不父、子不可以不子。(君、君たらずと雖も、臣は以て臣たらざるべからず。父、父たらずと雖も、子は以て子たらざるべからず)」。 (孔安國「古文孝經序」)

京都大学吉川幸次郎による批判 (『論語の話』) → 孔安國「古文孝經序」 = 偽書。日本で滅私奉公、自己犠牲として増殖・肥大

## 「孝」「忠」の本義

「夫孝、徳之本也、教之所由生也。復坐、吾語汝。身體髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」。 (身體髮膚、これを父母に受く。敢て毀傷せざるは、孝の始めなり。身を立て道を行い、名を後世に揚げ。以て父母を顕わすは、孝の終りなり。夫れ孝は親に事うるに始まり。君に事うる (誠実に応対する = 忠) に中し。身を立つるに終る)」。 (『孝經』「開宗明義章」)

## フランソワ・ノエル『孝經』ラテン語初訳

「子としての敬意 [孝] *Filialis observantia* は、すなわち万徳の基底 [徳之本] *omnium virtutum basis* である。……子としての敬意の発端 [始] は、両親から受け取った身体や皮膚をあえて傷つけたり、損ったりしないことである。[孝の] 成就 *consummatio* あるいは目的 [終] *finis* は、自分の倫理的実践 [生き方] を正しく完成し、徳を尊重すること [立身] *mores suos rite perficere et virtutem colere* であり、没後に偉大な名声を残すことによって両親が賛美されるようになることである。子としての敬意の発端は両親への従順から、また中間的には王への奉仕から、そしてその目的 *finis* は、倫理的実践の完全さ *morum perfectio* から発出する。」 (Francisco Noël, *Sinensis Imperii Libri Classici Sex*, Pragae, 1711.)

## 忠孝の逡巡

「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」。忠義を後白河上皇に尽くそうとすれば父、孝を父清盛に果たせず、孝を清盛への果たそうとすれば、忠義を上皇に尽くすことができない。(頼山陽『日本外史』巻一)

## 諫諍

### 諫諍章第十五

曾子曰。「若夫慈愛、恭敬、安親、揚名、則聞命矣。敢問。子從父之令、可謂孝乎。」  
子曰。「是何言與。是何言與。昔者天子有爭臣七人、雖無道、不失其天下。諸侯有爭臣五人、雖無道、不失其國。大夫有爭臣三人、雖無道、不失其家。士有爭友、則身不離於令名。父有爭子、則身不陷於不義。故當不義、則子不可以不爭於父、臣不可以不爭於君。故當不義則爭之、從父之令、又焉得爲孝乎。」(曾子曰く、……子、「父の令に從う、孝と謂うべきか?」子曰く、「是れ何の言ぞ、是れ何の言ぞ、昔者天子に爭臣七人有り、無道と雖も天下を失わず。諸侯に爭臣五人有れば、無道と雖も其國を失わず。大夫に爭臣三人有れば、無道と雖も其の家を失わず。士に爭友有れば、則ち身、令名を離れず。父、爭子有れば、則ち不義に陥らず。故に不義に當れば、則ち子、以て父を争めざる可からず。臣、以て君を争めざる可からず。故に不義に當れば則ち之を争む。父の令に従ふ、又た焉ぞ孝たることを得んや?」)。

## 日本語訳 第十五章

### 諫め

ある弟子が孔子に尋ねた。「それでは、親を愛し敬うこと、安らぎを与えること、名声を高めることが何であるかをよく理解した今、再びお尋ねしたいのですが、もしある息子が親の言うことに完全に従うならば、その息子はすべての孝行の義務を果たしたと言えるのでしょうか?」孔子は答えた。「何を言っているのか?何を言っているのか?昔、皇帝には七人の諫言者がいて、たとえ皇帝が悪いことをしても、帝位を奪われることはなかった。諸侯には五人の諫言者がいて、たとえ悪政を行っても、領地を失うことはなかった。国の宰相には三人の諫言者がいて、たとえ悪事を働いても、家を失うことはなかった。賢者には一人の友人の諫言者がいて、そのため名声を失うことはなかった。父親には息子の諫言者がいて、そのため悪事に走ることはなかった。だから、父親や王が過ちを犯したときには、息子や臣下が必ず諫めるべきである。どうして親の言うことに完全に従う息子が、すべての孝行の義務を果たしたと言えるだろうか?」

### 革命

『孟子』は、自らの欲望の充足に走り、民衆に配慮するどころか、かえってこれを虐げる為政者を、資格を欠いたものとする。そこで資格を欠いた為政者がどのような報いを受けるのか、結局は革命されるのだとする孟子の最も有名な文章について見てみる。

「齊宣王問曰、湯放桀、武王伐紂、有諸。孟子對曰、於傳有之。曰、臣弑其君、可乎。曰、賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘。殘賊之人、謂之一夫。聞誅一夫紂矣、未聞弑

君也」。(齊の宣王問うて曰く、湯、桀を放ち、武王、紂を伐つと、諸れ有りや、と。孟子対えて曰く、伝にこれ有り、と。曰く、臣、其の君を弑す、可ならんや、と。曰く、仁を賊う者、これを賊と謂う。義を賊う者、これを残と謂う。残賊の人、これを一夫と謂う。一夫紂を誅することを聞く。未だ君を弑するを聞かざるなり、と。)

(『孟子・梁惠王下』)

ノエルはこれをどうしているのか。その訳はつぎのとおりである。

さて〔齊の〕宣王は、〔王国の平和な統治よりも戦を望んでいたが、〔あるとき〕ふと〕尋ねた。「こんなことが言われているが一と宣王が語った一君主、せいとう成湯は、打ち負かした主君、桀を〔南方の配所、そう巢〔南巢〕に〕追放し、[[桀は〕その地で三年後に惨めに死んだと]。また武王は、主君、紂を武力で攻め、[ぼくや牧野の戦で彼を] 打ち負かしたと言われている。これは本当だろうか」、と。孟子が宣王に〔言う〕。「そのようにさまざまな書物や、また、確かに帝王たちの年代記〔『書経』〕に記されています」、と。

〔齊の〕宣王は、「しかし桀や紂は」、と、宣王は応じた。「実の主君であり、成湯や武王は国王の臣下であった。だとすれば、国王の臣下らに、自分の主君を脅かしたり、殺したりすること〔弑〕が許されるのだろうか」、と。(『中華帝国の六古典』『孟子』『梁惠王下』篇)

これは君主に対する「忠」を説きながら、それに反してはならないと説く儒教の弱点を衝いた痛烈なあてつけの批判である。これに対して孟子はどのように弁明したか。ノエル訳はつぎのようである。

宣王に孟子が〔言う〕。「されば、君主や王は、慈愛〔仁〕と公正さ〔義〕をもって帝国や王国を管理するために委任されているのです。ですから、もしも君主が無慈悲で、すべての慈愛の感覚〔仁〕を捨て去るなら、彼は君主の面汚し、あるいは略奪者 Imperii labes et praedo〔賊〕とよばれます。もし強欲で、すべての公正〔義〕の法を転倒させるなら、彼は君主の腐敗、あるいは破壊者 Imperii exitium et eversor〔残〕とよばれます。つまり君主の面汚しや略奪者、腐敗や破壊者〔残賊之人〕であるなら、この者はもはや君主とは見なされず、一私人〔一夫〕 vir privatus と見なされるのです。ですからわたしは、かねてより一私人、紂は武王の処刑〔誅〕に運命づけられていたのだとは耳にしてておりますが、主君たる紂が、王国の臣下から殺された〔弑〕とは、まったく聞き及んでおりません」。(『中華帝国の六古典』『孟子』『梁惠王下』篇)

このようにノエルの訳は、非常に直接的に、徳を欠いた君主はその資格を剥奪され

なければならず、最悪の場合、天誅を免れない、という『孟子』の主張をヨーロッパに紹介するものであったのである。フランス革命勃発の78年前に。